



Photo by Kikutani

秋のミズナラ林でドングリを食べ続けていた親子のクマ(9月19日)

人とクマの関係は新たな局面を迎えた

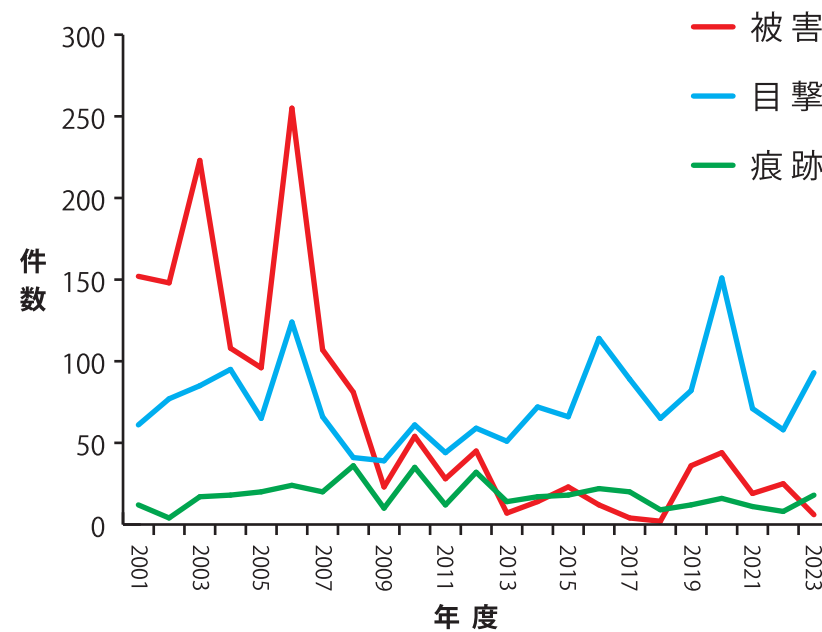
2023年度は東北地方や北海道などでクマの出没が相次ぎました。新語・流行語大賞のトップテンに「OSO18／アーバンベア」が入ったことをご存知の方もいらっしゃると思います。全国で人身被害を受けた方は過去最多となる219人に達し、うち6名の方が亡くなられました。また、クマの捕獲頭数も過去最多となり、ヒグマとツキノワグマ9,097頭が都道

府県や環境省の許可を受けて捕殺されました。

こうした状況を受けて、環境省は四国の個体群を除くツキノワグマとヒグマを指定管理鳥獣に追加しました。シカ、イノシシに続き、国の補助を受けて総合的な調査や対策を行う対象の野生動物になります。

軽井沢町での目撃・被害状況

軽井沢町では山菜採りの方とクマの接触事故が起きてしまったものの、人間の活動エリアにおけるクマ関連の情報は113件と例年並みであり、網戸を壊されるなどの被害の情報は6件にとどまりました。目撃件数は93件と比較的多く、そのうち約6割を2歳以下とみられる若いクマが占めました。シカやイノシシのわなに錯誤捕獲されたクマの数はのべ11頭で、2020年の56頭、2021年の25頭、2022年の20頭から減ってきています。



軽井沢町内におけるクマの情報件数(2001～2023年)

ピッキオでは、2000年から軽井沢町の委託を受けてツキノワグマ対策事業を行っています

境界線上での対策

軽井沢では「森の街」としてクマの生息を認めつつも、適切な距離を保つ努力を続けており、6月から10月は深夜から早朝にかけて町内をパトロールし、ベアドッグによる追い払いを実施しています。とはいえ住宅地と林地が隣接している場所で人とクマの間に境界線を築くことは難しく、発信器を装着していないクマであればなおさらです。

2023年の軽井沢は比較的平穏な一年だったとはいえ、小

学校の近くでクマが何度も目撃され、捕獲された1頭をやむをえず安楽殺しました。その場所は国有林が住宅地に突出しており、発信器を付けたクマも時々訪れます。人とクマの不幸な出会いを減らすために、クマへの発信器装着を進めるとともに、小学校でのレクチャーや、林と住宅地の境界をはっきりさせるためのやぶ刈りに力を入れました。



クマが利用する林のやぶを地域住民が刈り払い(左)、通学路沿いの見通しを確保した(右)

日頃からの対策の積み重ねが大事

前述したように、2023年は東北地方などでクマの大量出没がみられたのに対して、軽井沢町では比較的平穏な一年となりました。軽井沢町周辺ではドングリ類をはじめとして果実がよく実っており、出没を後押しする要素は少なかったと考えられます。

一方で、普段からの地道な対策の積み重ねも出没を抑制する力になっていたはずで、全国的に大量出没がみられた2006年には、軽井沢町でも250件を超えるゴミ荒らしなどの被害が発生しました。その後、誘引物管理をより一層徹底し、発信器を装着したクマに対する追い払いに力を入れた結果、被害は減少し、人間の活動エリアでの人身事故も2011年以降発生していません。

2024年度は親から独り立ちする若いクマが増えると思っており、ベアドッグたちとともに早めの対応にあたりたいと思います。このほか、クマを引き寄せることになる餌付けの禁止を徹底すること、行動経路上にセンサーカメラや音声発生装置を設置することによって出没を抑制するしくみの開発に注力する予定です。

